

1833
29

繪本古文記三篇卷之五

圖錄

光秀強諫信長之圖

信長云瀧川一益と名馬を揚ぐ圖

信長云怒て光秀を手擲り殺す圖

信長云忍林寺を燒けし圖

信長云篠山眺望の圖

蘿根樹怪異之圖

信長云蘿根の怪異を燐子怪之圖

圖

大服侍外武部智靈譽上人法圖

澤古宗日蓮宗捧印書法

日蓮宗法論詳義の圖

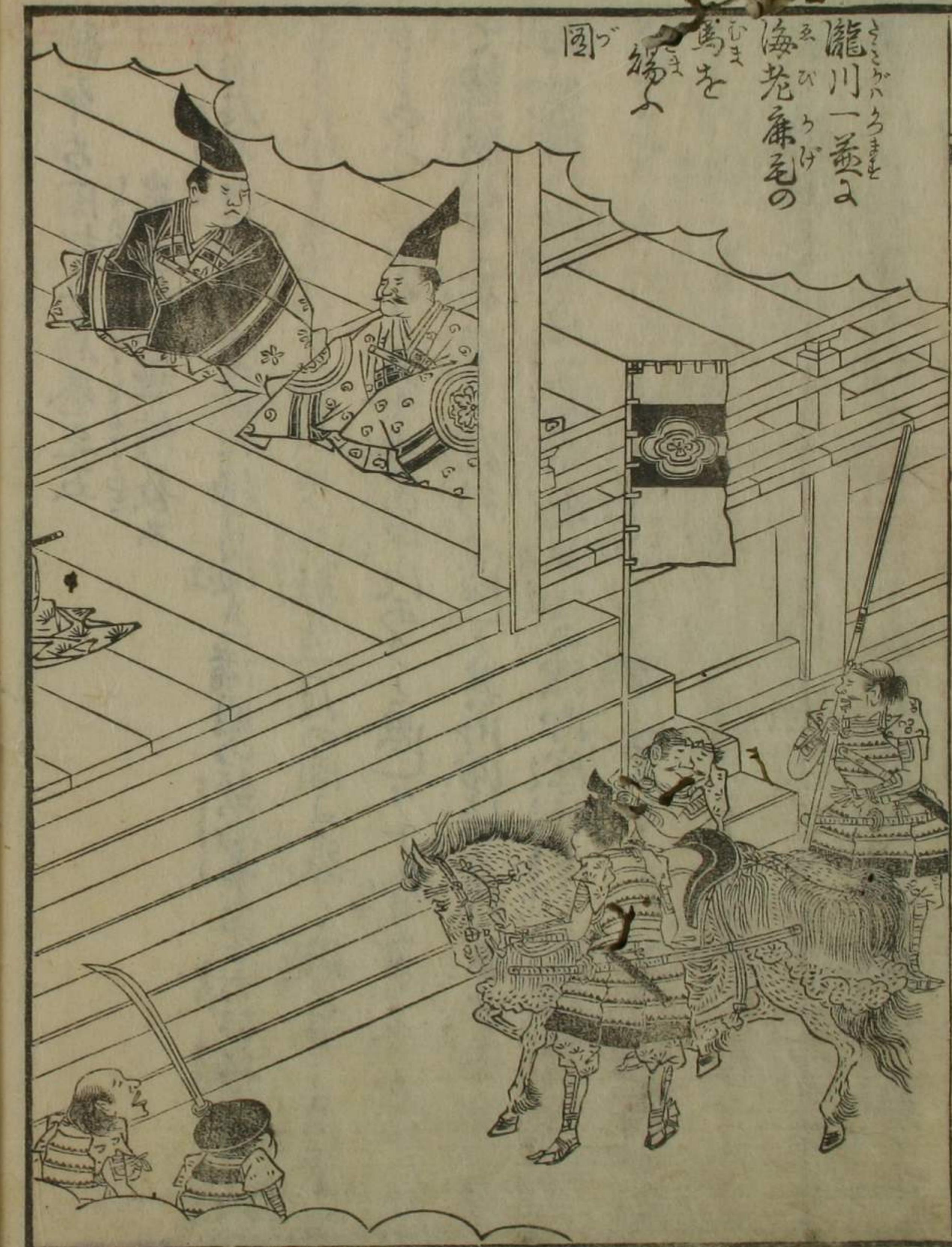
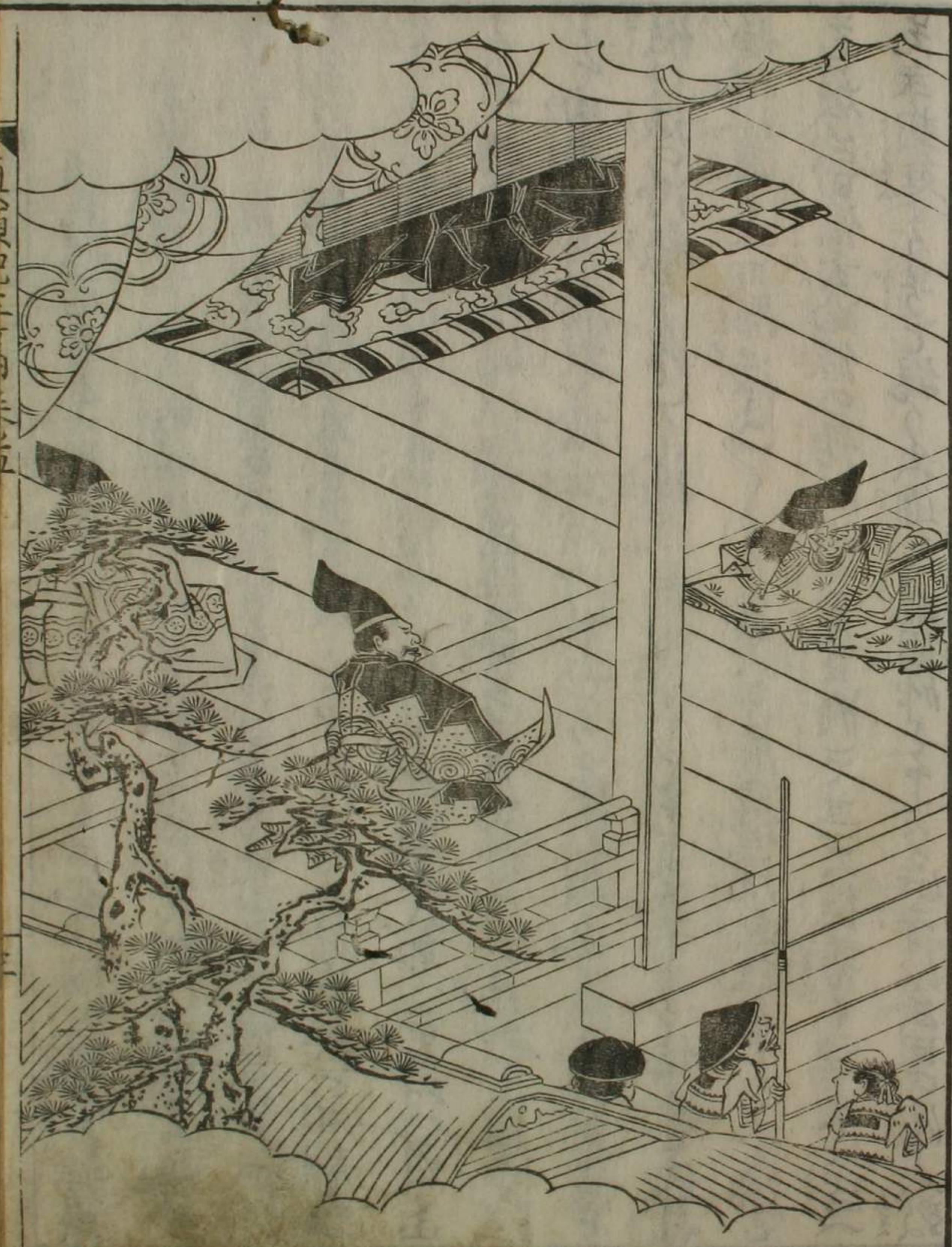
澤古宗日蓮宗般若書と持印圖



繪本右圖記三篇卷之五

光秀強諫信長云

小田右大臣信長云軍威に海より遥き諸國の敵黨大すとび拓ふるに來
至るも集あはれが武田の強欲を一月の間より悉く滅亡せしに方
どよりの臣今ハ天下安の中にはうと恩をも空をう今度甲信よ
て勢ひのねすよに嘗て記行の臣と其御沙汰よろびまつ申ね信忠
卿援兵の御働きよ求救ケ國平均の御沙汰がくにほ武の氣後づ
ましがくに天下のぞ配従て御裏より參りて先考は後守處
す御裏のちと進らるゝ勝川左近の監一筆よ野一園希に信忠
久小袖一郎を添へ上り勝川左近の官領より令せらる其へ上勝者廉毛の
馬と下されけ馬より事へ國をじと佐乃は勝川邊で辯外急と附し



て退く河尾肥前守今度の恩讐を感ぜらす。南豐一國と繩より虎勝義
又信乃に至科る。并あ内垣御川中條のに郡を下され毛利河内守又信例
往京郊と繩。其外陣系のね本曾左馬院義昌完山へ石梅雪等を以
安堵の印教書を繩。馬ち刀等を教へとやせし別々虎蘭丸と河尾肥
前守が田代岩村の城主と仰。信長度の印小姓園平八節より岩村の内金山
よみた鷹の二郎を繩。ひ諸方の仕事室す。既に日の始御と園みじ
とて甲府へ。も勝れが城江川御宿せらる申ぬ厥事てば不の御津と
駕けぬの御殿を廻りて捕獲をひき。て乞ひ返す。信長を御機
囲は満く一日滞留。まづは室に甲府の後院を林寺とす。寺
毛の放去。田信玄。海猿の傍岐川和尙を随て其大徳著く諸國に宣へ
先年朝廷より号と繩。又通智勝國師とよろけ。まに武田の浪人殺

多賀三門は信長云。御父子は。石山序。以後者をひ被浪人ともとせ
き。有名命。ひともとも圓脚とほり。寺僧とも祇く。食い應。宰。食を
追出。ひとも。刑せらる。ひふひもて。食乞せど。やとて。ひ有。信長云。ひと
訴。ひ紙。れど。亘寺中と追出。我刑罪の定。財食乞ひ。もふひと言
面。今も浪人至。不復。ひか。未あ候。のひ。其。従。ち。ひ。押。あ。ひ。探。出。せ
ま。ト。知。ひ。か。ひ。も。傍。ひ。も。乞。ひ。地。強。く。た。と。寺。被。滅。よ。ひ。と
の。人。と。殺。ひ。う。傍。輩。の。る。種。よ。ひ。と。じ。と。密。よ。彼。良。人。も。と。あ。ひ。む
毛。ひ。有。信。長。云。の。討。ひ。寺。中。と。善。く。机。ど。一。人。も。捕。ひ。得。ど。か。く。と。言
ひ。及。び。ひ。れ。び。信。長。云。天。然。如。て。絶。ひ。惡。き。坊。主。原。が。う。ヨ。シ。ム。寺。も。人。も
一。日。よ。境。屋。捨。よ。と。そ。は。田。九。節。次。節。長。翁。川。寺。落。郎。園。小。十。郎。在。萬。門。赤
座。七。節。在。萬。門。赤。い。金。し。終。御。所。惟。信。自。向。守。ど。も。出。て。佛。坐。て。や。そ。る。

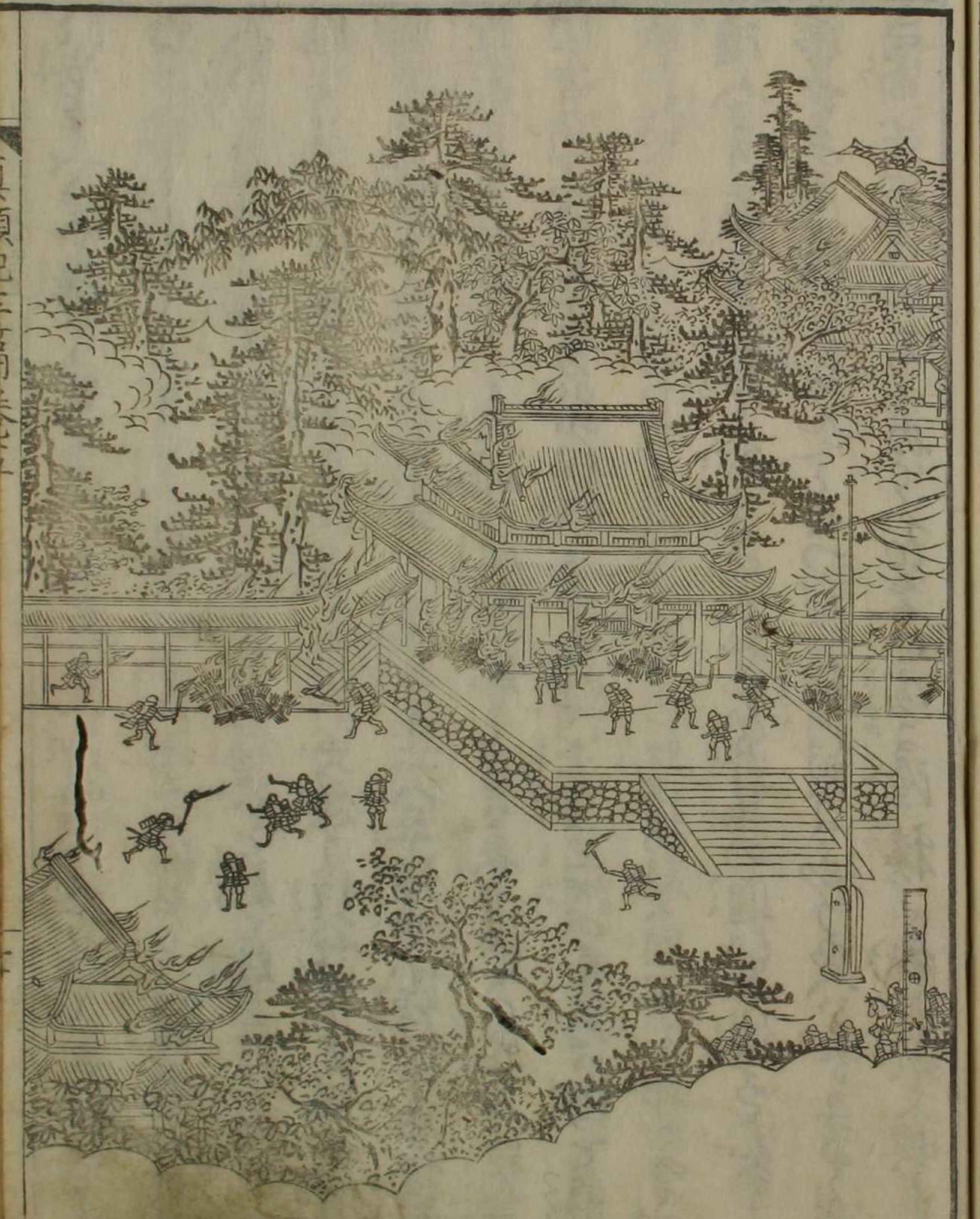


御宿方のれりども當寺の年々き伽藍は火波文は川和尚大徳
の支那の御と財の御燒に燒度に落つて宜う年とひまむけに御
彼よ遠ひは嚴をきよ當よりとどもさう重刑又多ひゆる嚴をあ
らだりとの命と助んとて命に背きゆる傍の業にてひりにや御歎う
を宥めらま寺傍局に追放せしむ候がるにも比處山を燒くひ
あひらうくいを教育を開き其門徒を教もあれど深闇あり世の佛
法海依の宗の者として佛欲法欲と恨みひえ未御心義、發はしませ
在すれまき御仕事たれまくはまくまよに信長云の此教年余
佛法世へ蒙り政るに背きゆきまうされば國の寺院と焼て圓圓
僧もと百姓よ國の嚴よ傳へんと恩されば光秀が諫言甚済
に潔せ給ひてえ来後多の大ねがれが大の眼を開き光秀を儒と

白眼を諭清せり大城天下と知れ信長が御き心を已加きる人の
い際にく行を止めての諫言からぞてこえられと大奇とて御り
が光秀をもとよりきて門を出さんとしるふを後身の信長ちよ
このほのと見て光秀が警戒の御もとれてお供右の舉を極
くも確けと六ツ七ツ叩きし案倒の夜をえて入終ひ並居諸をも
けまう思と悟てそむ居る光秀の諸士の刀を小刀みて面を
おもとも主しそぞ圍を食えを以ての御燒のびくわざとを喜んで
主しそが細河刑部を捕獲する光秀の元の居うちまくじゆ室を
尋ね易く思ひ余す度の御燒のびく御燒のびくとを喜んで
是に酒を口に石也とまでが是や心を抑ひゆるれと云光秀
のことを改め我令りてようゑに捧げまよとす何ぞその御嘆うと云

信長公
惠林寺

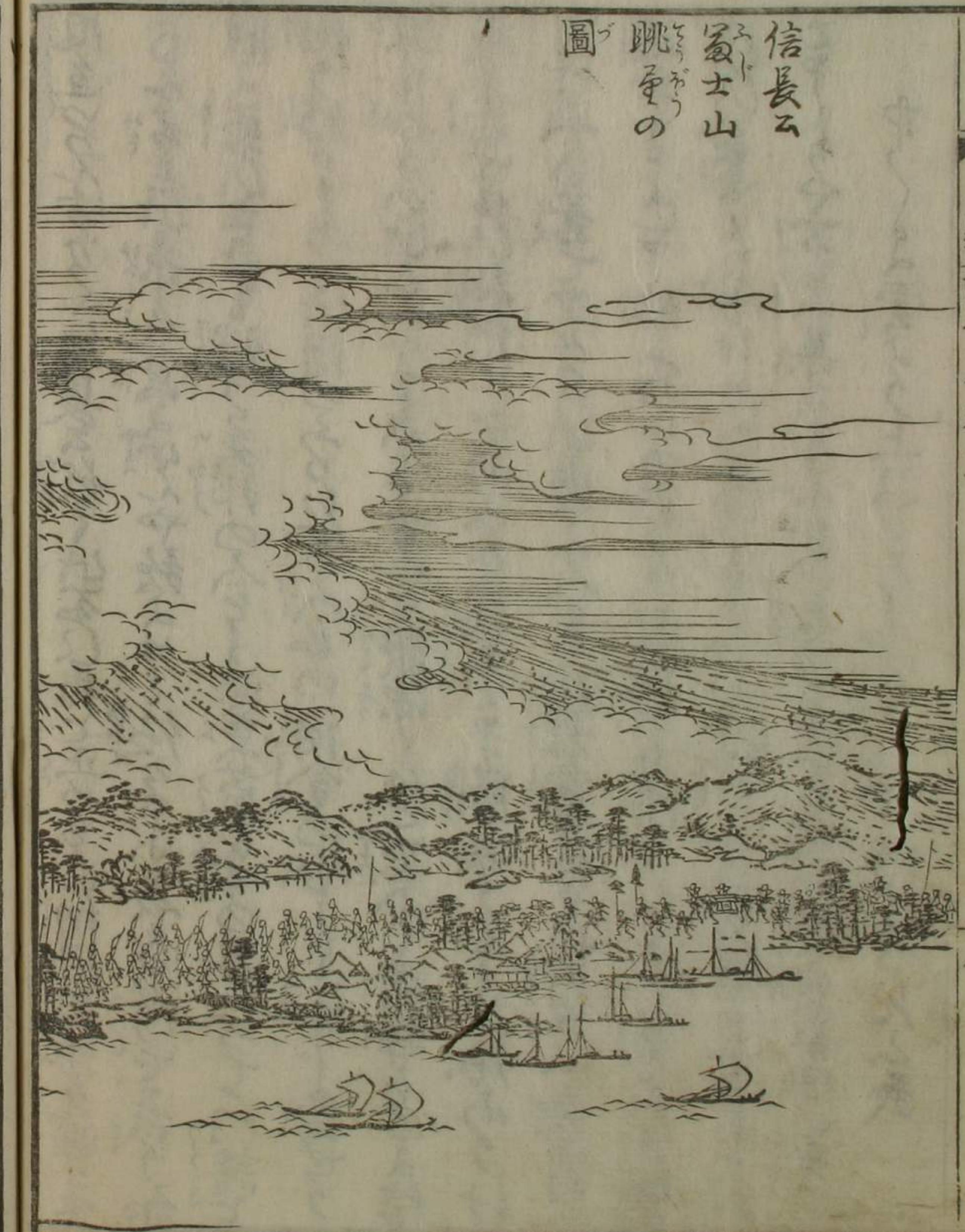
焼
まつた
図



に止ちやべきや構く心安らじと書ひ下すの事あらぐと其席を
はして始く退臣へうなづか信長公のてりゆ候付らし軍兵二百余
人被恵林寺より押よせ風より焼きを積火を放て焼玉れがおど
身も遂て山門本堂を食事方より鐘樓へ移り候お岐川太通脇勝
陣隊を始りに諸寺の長老六人軍寮十二人卒傍四百傍に十三人悉
焼殺され馬綱をくと只河の便所をかうる衣冠しづた之其間
は不と併せて上方路へ詮きゆる駿河をは三河の車石の街と造
石舟除き前ある樹ひ毛を従きゆる駿河をは三河の車石の街と造
築へうる嚴重の宮とは奉の人ねび牛馬の通ひ毛を停ら室す
信長の御威勢盛んと云つば強河内よもうかが名もるる
き蜀士の根の附もぬてゆるるの頂て津橋くわ日影み映

周至つて今方方く信長公候くけふて馬と止らき細河刑部を脚差
あるを石見系毛を是よせんや致よめと仰々小夜の諭で有り和
國より並びゆきもぼく美邦の金と此美喜喜峰の名ひての諭と
仰りけりとのとて國のあらむあら人の内令のゆゑ詔へ爰せう
早朝ゆきのけりとよもやせんも眾源くひと堅く固辞とるゝ信
長公せひ極行にて此とを家士とや陽子さんと又恵ゆうけ
立ひ爰る事てやうるべし山見人ミ七代後靈天宣の御宇一秋の内
漏出するはシヤ候て此山の神さん女作よましく士と富さんと誓
約の爰士といけりはスの後よりまみえ林を雪の盡るをりてふ森
てやとうや万葉集より不動の文字ノアリヒテリス古経の室家卿の考
中へよ雲うつ上りてまくじをねむ程もあらじふ矣

信長
スメト
富士山
ムシツサン
眺望の
ミタガフ



紅葉のあゆ

金のこゑる根くとほし赤く富士の居候にれをも
りあに人の此の歌詩又歌うそ

絶入層霄富士巖

藩根直厭三州間

六月雪毛麿素毛毬

何處深林覓白鷗

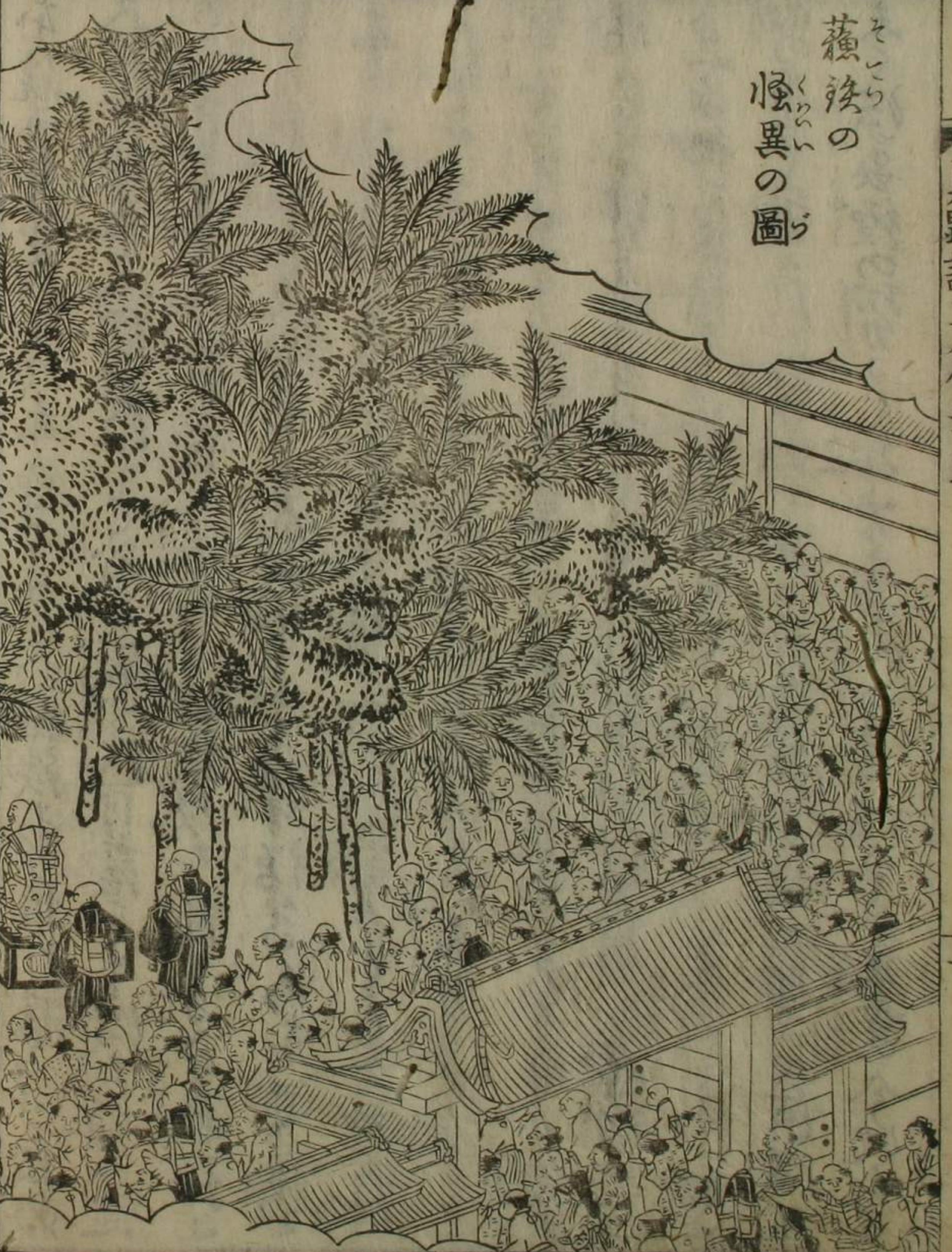
大やきことざれも富士低くされども續くふもほるどやけた
且欲も竹もひく寒よ希みの名ふかうべとやよる信長云
直へへせかひ引出地獄多煩うまかると急がせめひに月十日安
ちの居候よぬくせ終

蘋根樹之怪異

けは不思議のみなるら泉又櫻のはまゆ園寺と名す日蓬宗乃

本院み本寺の庭へ年經つて大蘋根あり根の一族すり枝數
五百余枝二十八回全にて枝葉繁盛日落とも濃き地
を往来するの心ぞ家よ往来くは蘋根を称すより殿松よ
近草枝葉ともに至ぢめぬよ枯れよとす寺傍等みを洒き残と
本寺すめどもと見て生活せりを計ると日を経て姪
の植えたり今づ塗方々く植捨へとされども教希なる大樹と
密易穿るる傍を空へやま拓と蘋根樹の下へ法華經を説く事もあ
りふ都不思議ぢる哉枯果にじ大樹次第もまた多く後又
聞びて宋元べ源の源のまもとて秦内南海の幽へとけ咲基
き法華經の功かとて枯る本の再び生來なるま世の今にあり

そくら
蘿衣の
怪異の圖



は樹を御視りて實も希代の古本の如きと云ひ難からうとて懸の廣庭を
挾まさらし一時の詠りよ傳へ経て御ちよすや懐へきもの出来たり
信長云々御史とよ同美独立しておほきるふ廣庭の方より志士
が至る度て叫びまじに怪と耳と口ほてすみよはく妙圓寺へゆ
くと云ひあち怪とぞ誰うあると云ふ蘭丸と云ふ號めらき
あくと宣ひてぞ參よき蘭丸と云ふ號を立て先て五邊石を用けて
楊柳よ出られり信長云り追毛刀そと立せ給ひ傍をきくと見詮は
川口や西口に屬へとあやめりかぬ駕き敷よ松崎に頭とお凄
く何とよ春のみならざとれ豫内よ从弟のむく怪へきをまつゝ
鷺園寺へゆくとすすりよく表蘭丸をくくと廣庭より立
臺をもうよ立ようと便りまだよびし蘿被のまと出ん

信長云
猿狹の
怪異と
図



う立つて御前へと入る。宴今の事す。蘿後の樹より御うひとやひ
信長云々矣。せひ彼蘿後をよ枯らしと再びまことに掌へる。
怪しきにやけ樹數百本と經つてが妖怪とて御す。あくも秀明
さは主車に令じ悪く切とてさんほしゆきみに勞せり。とれく乃
寝てアヘーセたままで蘭丸。御次の間より宿して往ちく。東方をす
と東雲にてを爲へ。う信長云々よく記出。終ひ菅谷九左門
を壬人ま三百人をも一時も蘿後を切棄しと令せらる。九左門長
もうれて三百人の主車よりをねせ。御慶度よりみ。信長云々の再令を
待て。信長云々性近習教。麦石連様側より傳をめで。主車より御
度を當。主車を傳へ。二三百余人の主車一には蘿後のりとよ立
ち。奇とよて切んとども。よ急死にして大地に倒し。血を吐て。岡越に菅

谷大よ。因し信長云々の御前へと入つて是へへゆかしと覗ひ。すら信長
云々物く抱をも宣ひ。始めて御度。うなづかだ。右に向ひ。魏の曹操
濯龍潭の梨樹を切て死せり。と云古本の靈又犯とぞ。うなづかだ。乃
蘿後を頤靈あり。此怪とぞ。櫻のは妙圓寺より。きぬべと。後見。之を
ば。宮若九右衛門。多くの人まをも。持記。を其日安土の城を出
て。妙圓寺より。うなづか。よ遠近の日蓮宗の美術男女妙圓寺の
蘿後こそぞ。とび。うち。櫻が。引て。鬼作。も。恐。と。震ふ。信長云々法力
フ。や。感。あ。ひ。ぬ。う。ん。妙圓寺より。うひ。う。み。難。き。家。主。の。功。う。と。す
を。引。扉。と。押。て。妙圓寺の。群集。ひ。あ。い。懐。殺。あ。る。の。そ。ん。き。な。う
されば。と。圓。き。圓。の。源。太。宗。親。寧。宗。禪。宗。真。言。の。傍。俗。も。け。事。理
も。服。一。え。改。家。も。う。者。教。を。も。流。宴。ま。委。主。の。所。の。東。中。の。鄉。と。よ。不

よお山寺とて日蓮宗の寺院あり。山寺は、本尊は、峯ノ檜林
の不化不燃と云。信玄が三七日間説法あり。元来豪傑ある所
危險安寧の男女群集と其役法を徳圓。信心を樹。上
並て妙圓寺の薦送の不思議被毛持ひ。何を余の家有
より遙々勝。日蓮丈室人の功德。又著明先の陰佛得逢
は。宗旨にてあくられ代へ替へ。本旨を捨。日蓮宗の心を候。改
宗とう者安土の市中にてんばす。乃至。えもん山蒲生郡安土と云
て。不思議をひき。信長。安。信を築き。徑を経て
椎葉村のひどり人自殺通とう風を商賈。傍流。集う所。また
まで。お彦川。諸國の大名郡縣の。えもん山蒲生郡安土と
かぬ安土の。お島原強倉。十隱寺社。うどり騒。一建は。二万石。

安土城を得て。御代長久を衍。これが日蓮宗の傳統妙圓寺を蘊
藏の不恩洋。う圓の。人臣法華。又信服の。をあれば。先に安土の城下
にまつ諸人を集め。遣使を初め。うも宣。と。まづ。アヌ安土西の郷と
アヌ北の山福寺とて。渾太家の寺。みけ。後。信。ハ。と。別小僧。哀愍寺。ア
開基。と。靈譽上人。玉念和尚。と。やせ。一。には。尼安吉。松高。院。に。よう
此心福寺。將後。セ。と。見。な。れ。け。附。幽。寺。又。ゆ。ひ。く。渾太家の説法。を。た。め
ら。ま。る。小。渾太家。不退の。や。ま。と。が。く。小。安。よ。清。で。素。て。説。法。を。徳。圓
と。玉。念。和尚。人の。ゆ。き。と。り。厭。り。て。法。修。と。入。渾太家。念。の。家。と。達。ひ
阿弥陀の本願。釋。る。の。令。主。の。家。の。中。の。中。の。寺。會。て。南。岳。阿。弥。陀。佛。體
念。ど。れ。が。八。十。信。劫。生。死。の。眾。隆。一。附。よ。清。滅。と。其。念。速。と。光。明。の。中。よ
納。ら。絶。ひ。て。捨。の。う。だ。光。明。遍。照。十。方。世。圓。念。佛。衆。生。攝。取。不。捨。五

向ひ法の圖

靈巻

太股傍脇
建部紹智

上人と



達十惡與諸不善一念稱名即得往生の心を説さし五陵三
後の女人も惡業煩惱一文不加の事も投げ放りとの仰誓願え
とばれじく難くゆく信して念佛としが若人も悪人も男も女
も皆往生と遂ると帝号清流あがく演らるる小乘清の男
女はす南無阿彌陀佛と唱へる始の後徳圓もろ者もかうじよ
次第くよ辯遂彼日蓮宗の妙山寺と行こう徳衆のえうんと安
あの市中け沙汰のみなう寔よ建部紹智大脇修助とす日蓮宗
の信心者も知れ不傳と人をもとめ坊主まとうよ法縫をうじ哉
不斎のをめこかへば兩人に傳すて玉念和尚の後法日く辯矣
うれを憐り彼を急よしの不審をもうけ返答ふくべる座か引
ゆじけ安去の市中にて淨玄家の説法を極ふじだ喜ぶ眞喜が玉念

坊主一刀よに殺し潔く切腹せばとや合せひ福寺の説法五中
へ進み入大勢の徳衆を押のけ玉念和尚のる座の下にどうど居
太齋とひよ玉念和尚一つの不審を向ゆテん經又釋く説法公
方候方に十余年未承真實と説教ふを承余弟の家有と訥
そと玉智の信を遂じり大か遁よ逃ざるやけ道苦へふと向玉念和尚
とて玉智とて寄り信人の身にして法向をせらるる余佛と汝の余
と云ひ我の我の不肖されども一寺の住職大俗と佛法の向言せん
吾佛不差之妻の家門の門下人を曰ひてよ其時お應方
返言せとみられが如智修財大に因てかくと笑ひ汝尔も吾傳
の經文を承家有とて玉智の危険とたらし歎くとも实大なる
法華の聖人達といふや向言がたくべきぞ行後痛きや余哉と嘲

爰を心福寺の貝那溝中立事て説法の妨どる曲者そし引出で
とくに種こそあはま勢一同よりけ集りもえ是門を宴坐せ
説法をぞめららんる

建部大服發宗論

去後大服僧助建部紹智の兩人ひ心福寺へ來よ妙ふ寺(馳まつ)
不傳ひ向ひ大恩(おこ)にてやうり我くあ人ひ福寺の玉念(よみ)と言せん
と被(ひ)き(ゑ)に十余年未だ未宴の經文をひ羅同(わよ)玉念我く
を大傍(おほ)と罵(の)り法同(わよ)び法華宗門のひ門寺石連奉れよ同名
せんとやひ玉念(よみ)と傳(まわ)しておひ(せんと云ひ)じと今我くと同名
あく心福寺へもひ法同(わよ)玉念を只一同(ひとしゆう)にさせ我くが教(い)と聞
かひと教(い)と變(か)ひ小不傳(ふしん)はく(きとま)玉念たとひ智文

扇の傍(おひ)と素(す)をおひて何(なに)を法儀(ほうぎ)を漏(も)とぎ彼(かれ)と法同(わよ)と云
ひとくにも秋(あき)と知(し)て絶(絶)りて漏(も)とぎ事(こと)もあんずれ(あんずれ)無(む)事(こと)と引
却(の)けて今(いま)け復(もと)せ捨(す)て其(その)處(ところ)秋(あき)が邊(へん)改(かい)宗(しゆう)
る者(もの)教(い)をもひて既(さう)とくも西宗門(せいしゆうもん)の源(げん)き要(よう)道(どう)ともひびと仮(か)
又(また)法(ほう)也(や)信(しん)もなしが法(ほう)同(わよ)を其(その)復(もと)せ捨(す)て化(か)宗(しゆう)ひ心福(しんふく)西宗(せいしゆう)
の希(き)までも思(おも)ひくよ以(い)家(いえ)せと乞(こ)祖師(そし)日蓮(にちれん)大菩薩(だいぼくしやく)まゝせ
法(ほう)也(や)あはひ我(われ)彼(かれ)玉(たま)念(ねん)坊(ぼう)と今(いま)にも同(ひとしゆう)言(ごんげん)及(およ)び
化(か)の傍(おひ)玉(たま)念(ねん)一(いつ)寺(てら)の傍(おひ)玉(たま)念(ねん)一(ひとつ)寺(てら)地(じ)跡(せき)と本(もと)寺(てら)の下(した)を
更(さら)く後(のち)同(ひとしゆう)言(ごんげん)も及(およ)びとやうり法(ほう)兩(りょう)人(じん)進(すす)んで、そぞとせひ(せひ)我(われ)も健(けん)
ニ京(きょう)都(と)おはすを奇(き)術(じゆ)く(け)法(ほう)論(ろん)の薦(すす)めを乞(こ)ひと
宿(しゆく)すもゆべて寺(てら)と不(ふ)傳(しん)坊(ぼう)を引(ひ)連(つれ)て京都(きょうと)にて急(いそ)ぐ其(その)

蓮宗の
ある僧を
解説

の圖



聖日高宗の卒寺妙嚴寺より貫主上人より附画右の次第と物語り宗論及びべきや否やと復へ貫主より御心稿寺の玉念易事の者より不傳をもとの論勝べきをすは先十七ヶ寺寺中と改博識の傍に掲げ回言に及ばじとて卒寺中後信と遙う儀よ十七ヶ寺のよ人達妙嚴寺より會合急や角やせんし詮義匪く之を小妙嚴寺の日誦進み出でヤタラハ松安寺の地に幽めざる信長云左城の地からふすり繩昌京都よ十信諸國の人民安よ集り今其地よやしく宗廟淳古宗より論じ勝者なりが故宗廟には勝てるにあらず其宗廟の堂んともろ附のものにしきまし加藤郡の奉寺へ至り及び近畿近左檀林の被祀不祀を嫌えども力不足を懐を擱と出へ毛等皆一日よおきもあら駄け合ひて回言せを

論頃るよりかづく伏安よりして衆議乞よ陞撰も出する人には先妙嚴寺の日誦妙嚴寺の日雄頂妙嚴寺の末役日誦妙嚴寺より元方乞るに人の其智舍利弗を歎き希舌彌樓那より勝て論議ハ迦旃延にも劣ぬ智識遼うれ建邦大服大丈怪ひこの宗論尚宗の勝利疑ひゆと小彌陀勇ミクタ寔ノ彌後圓上松謙信能登圓完水の城と東唐城を長安より人に討死とあるを即ち湯門と泊す貞安和尚の死をのぎてくに尼安安云し底来る信長云貞安が徒學は度才とするに安云の因中より一宇を達て西光寺と号け乞ふ後さらば貞安玉念和尚と安云の宗の後繼うれび玉念ひ安の始發をと貞安又地名アヒドウルと後セアシラス又何シニ宗論ナリ私ニ派されが先に京郊卒寺(ヤ)と其アシヌ便ヒと玉念

代モ京撫平寺知恩院ニ系シ右の文綱を言ヒ及ミテハ内
て尚穢活譽人一家論のヲ王念貞安ニ免許アリ且象乃瓊徧
醫寺仰庫和尚と京郊東山心院の助念和尚兩人と妄去又余向セ
一也家論免許のヲ信長ニ言ヒアリ日蓮宗の平寺中ノモ
日附又熱代にて本圓寺日祐上人安去ニ係ヨリも家論乃体を
所ノラ後ニ信長ニ双方とも論後之仕延臺もあリ書付を石
ヤ出ゲキ有矣郊若七郎又治出テ思て是より日蓮宗の書曰
今般源家玉念貞安の兩人と法宗妙景寺日諦
妙満寺日雄頂妙景寺日祐妙景寺大慈方と宗論
免許之候而知はリ法宗論ニ勝也玉念貞安が首
を刎ラシ日奉の念佛宗停止ニ休済歟先と云立傳
左モ既宜御被羨希ト云極云狀也

テ至り方一法宗貞也秋くた一命をテ致シテ
右モ既宜御被羨希ト云極云狀也

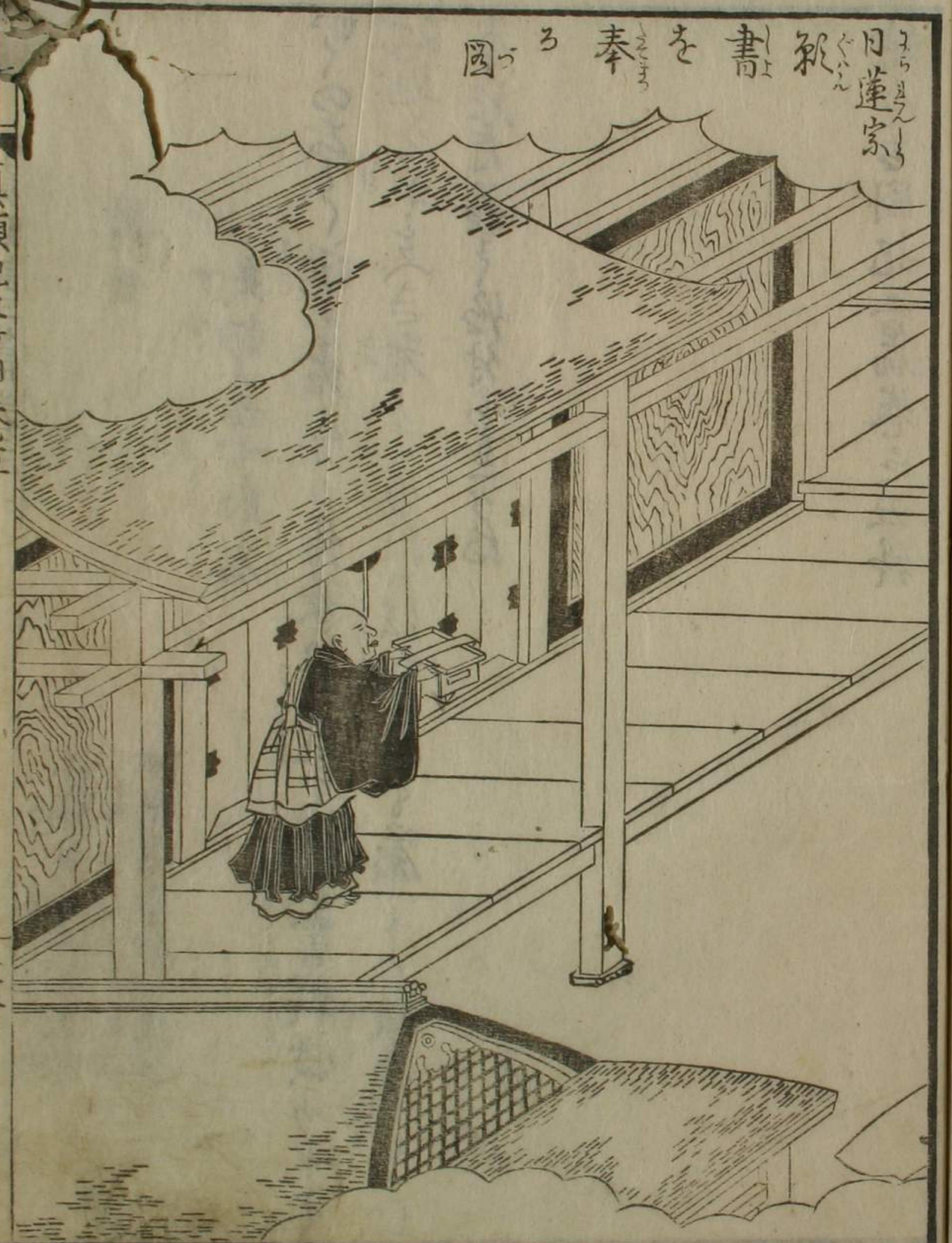
月日

不傳坊日忍
建部紹智
大服傳助

知郊若七郎及

津去宗の書又曰

伏度日蓮宗と法同の依存る経付を良ひ松悟等
得勝利りて相手の傍たれ弑く被付ニ付念佛三紹者
め被付樂往生度ひ若松悟た於貞ア一者ウチ換も當
沙汰ニ至り仍る一書也



月日

ヤバ
矢部若七郎友

正福寺靈譽玉念
西光寺聖譽真安

やくのぢとく酒の居よろす信長云日蓮宗のれ書我假みそ
政道を執る者どもうんばは論の附も廢へて教云固せしむ
るに有無く終付らざるを

繪序古圖記三篇卷之五終

